

まんだら通信

第155号(通巻187号)

平成21年(2009)05月 佛誕2575年

295-0103 千葉県南房総市白浜町滝口1084
真言宗智山派 天神山 紫雲寺 高橋 龍渉
郵便振替 00120-2-43163 紫雲寺
TEL0470-38-4740/FAX 0470-30-5040
<http://www.shiunji.org/>
Mail post@shiunji.org



棺を担うお釈迦さま

ご存知のように、お釈迦さまは現在のネパール南部のタラーイ地方にあったシャカ族の国カピラヴァストウの王子で、お后ヤシヨードラー姫との間にラーフラというお子が産まれましたが、二十九歳の時にお城と家族をあとに出家してしまいました。

お父さまシュッドダナ王の嘆きは、想像を超えるものだったでしょう。そればかりか、お釈迦さまの弟君ナンダ

を始め孫のラーフラ、養母マハーパジャパティ、お后ヤシヨードラー姫(それに多分それぞれのお付の女官達も)甥のアーナンダと、ご自分の血筋が皆お釈迦さまのお弟子となって出家してしまつたのです。

年老いてから、王位を一族のバドリカに譲つて、ご自分をご隠居の身分になりましたが、その新しい王さまもお釈迦さまを慕つて出家してしまいます。

我が子が、インド中からブツダとして敬愛されていることは、親としてこの上ない誇りではあつたでしょうが、その反面、一国の命運を預けるべき大切な跡継ぎを

失つた淋しさも喩えようがなかつたと思います。

九十七歳になつて最後の床につくと、益々淋しさが募ります。

老いた王様は、枕もとに駆けつけた長老達に、子や孫や甥たちに一目会いたいものだと、つぶやきました。

その頃、もとの王子であるお釈迦さまは、マガダ国の王都ラージャグリハ(王舎城)の郊外のグリドラクータ(霊鷲山)に、大勢のお弟子達と滞在しておられました。

この霊鷲山はお釈迦さまお気に入りの場所、法華経や多くのお経が説かれたところとして、また佛蹟巡拝のコースとして今も有名なところで、駐車場から頂上まで歩いて一〇分ほど。

坂の途中に、当時の王

侯貴族がお説法を聴くために、乗つてきた乗り物を降りる決まりの場所があつたりして、その頃を偲ばせるところでもあつたのですが、最近では日本の援助とかで整備が進み、昔の面影が薄れていきます。

さて、急を聞いて駆けつけたお釈迦さまに、シュッドダナ王は最後の願いとして、お釈迦さまのその手で我が身に触れ、済度してくれるように願いました。

お釈迦さまは、その手を父の額の上において最後の説法をされました。

「ご心配には及ばない。あなたの徳は清らかであり、心の汚れもない。悩み苦しむことはない。これまでに聞いた法を思い浮かべ、これまで行なつてきた善行を信頼して、安心なさるがよい。この最後の時にゆつたりしたお心を持たれるがよい」

王様は、ご自分の手でお釈迦さまの手を握り、それを心臓にあて、仰向けのままで合掌し、微笑みながら息を引き取りました。その時、国中の人びとは声を上げて泣き叫び、髪をむしり、地面に倒れて嘆きました。

やがて、老王の身体は香水で清められ、棺に納めて宝石で飾り、花を振りまき、香を焚きしめました。

お釈迦さまは、のちの時代に人の心が乱れて、親の恩に報いようとしれない不心得者が出ることをお考えになり、模範を示すために自らも棺をかつがれました。

その時、多くの神々も見送りに来ましたが、中でも四天王はその棺をかつぎたいと申し出て、人の姿になつてその仕事を引き受けました。

遺骨は黄金の器に納められ、それを祀るために塔が建てられました。

お釈迦さまは、人びとの問いに答えて「父王は、清らかな人であるから淨居天にうまれるであろう」と保証しました。

◆4月になって、季節が足踏みをしているかのように、肌寒い日が続きました。このところ漸く本来の暖かさになつたような気がしますが、皆さまは如何でしょうか。◆『棺を担うお釈迦さま』は、渡邊照宏著『新釈尊傳』(大法輪閣版)を参考にしました。渡邊先生は、学術書の他に沢山の一般向け書物を書かれました。特に岩波新書の『仏教第二版』『日本の仏教』『お経の話』は、常識としての仏教を知る格好の三部作です。何より、初版発行後50年の現在も版を重ねていることが、学問的にも正しく、読みやすいという何よ

りの証拠でしょう。何を抛り所にすべきか、迷うことの多い今の世の中。得るものが多いと思ひますので、一冊でもお手に取って見ることをお勧めします。仏教総合誌『大法輪』も、知らず知らず仏教の常識が身に付く、得がたい雑誌です。書店に立ち寄った時、手に取ってご覧下さい。どちらも“銭・金・物”よりもっと豊かになる方法があることに気付かされます。◆上の大きな写真は、5月5日のこの日に写した白浜中学校下の海岸です。今年はハマヒルガオが例年

以上に見事に咲いていました。今にも降り出しそうな空模様でしたが、雲の濃淡がよく写っています。“お手軽カメラ”ではこうは参りませんね。30年前まで、この海岸はヒルガオの他ハマエンドウやハマボウフウ、ミヤコグサなどが、それこそ足の踏み場もないほどでした。◆今月の野草は、同じ日に写したコウボウムギ(フデクサ)【かやつりぐさ科スゲ属】です。◆孫、龍祐(りゅうゆう)が卒業して帰郷しました。一生が修行ですが、ジイが褒めては実も蓋もないのですが、実に生真面目な若者です。 09.05.06 龍渉



余滴

につぼん人情小噺

三遊亭 鳳豊

第四十一話 チョーク

いよいよ新学期も始まりまして、先生方も落ち着かない日々を過ごしていらつしやるのではないかと、実は私、心配しているんでございます。

なぜかと言うと、最近のお子さんは昔の子供に比べて、頭がいいですからね。

ある時、先生が子供向けの本を読んで聞かせてましてね、「ひろし君は、その村を去ることになってしまいました。おじいさんもおばあさんも泣きながら手を振っています。飼っていたヤギもいつせいに鳴き出し、ひろし君とお別れを告げていました」なんて読んだら、突然、ひとりの子が手を挙げたんです。

「先生、その文章は間違っています。ヤギはいつせいに鳴きません」

「え、どうして？」

「ヤギはメーメーで鳴く」

こういう子は、将来、噺家になったらいいと思いますが……。

学校といえば、黒板にチョークを思い出しますが、今日はそのチョークにまつわるお話をしたいと思います。

私の知人がある日、チョーク工場を見学に行ったんだそうです。そこで、素晴らしい話をお土産に持ち帰ってきましたので、ご紹介します。

今から五十年前、まだ小さかったチョーク工場にひとりの先生が社長を訪ねてやってきました。その人は、近所の養護学校の先生でした。

徒がいるんです。卒業しても、知的障害がありますから、就職するところもありません。でも、私はたとえ一週間でも働くことの素晴らしさを教えてあげたいんです。

どうか、一週間だけ雇っていただけないでしょうか」

あまりに熱心に頼まれましたから、社長も「じゃあ、一週間だけ」という約束で彼女たちをアルバイトに採用したのです。

会社は朝八時から始まります。でも、彼女たちは毎日七時には玄関に立っていました。雨の日も傘を差して、工場の門が開くのを待っていたそうです。

社長は、彼女たちでもできるような簡単なラベル貼りの仕事を与えました。

流れ作業のラインに参加させるわけにはいかなかったからです。そんな雑用のような仕事でも、ふたりは一生懸命に働きます。みんなが十時や昼休み、三時の休憩をとっているのに、少しも休もうとしません。

「そんなに働くよ。休んでいいんだよ」

他の従業員が声をかけても、聞こえていないのか聞いていないのか、それこそ夢中になって働くのです。

三日経ち、四日経ち、五日経ち、約束の日が近づいてきました。

その時です。その工場の従業員全員が社長に「この子たちを正社員にしてあげてください」と直談判を始めたのです。驚いた社長が理由を聞くと、「私たちは、彼女たちに働く素晴らしさを教えられた」と言うのです。

つまらない仕事でも、あんなに楽しそうに、一心不乱になつて働いている。

「彼女たちができないところは私たちが全員でカバーしますから、彼女たちを辞めさせないでください」

ふたりの少女が社員の働く意識を、わずか一週間で見事に変えたのです。

社長は、仕事を終えたふたりを呼びました。

「ありがとう、君たちのおかげで、みんなにやる気生まれたんだ。先生との約束は明日までだけど、君たちさえよかつたら、このままずっとここで働いてくれないか。先生には、僕のほうからお願ひする」

こうして、ふたりは正社員になれたのですが、ラインの作業にはむずかしくてなかなか参加させられませんでした。その時、社長の頭にひらめいたのは、信号機だったそうです。

（この子たちは、この工場まで徒歩でやってくる。ということは、信号を渡れる。だったら、色彩は識別できる。よし、ラインを色で表せば、工程が分かる！）

社長は、それから工程をすべて色別けし、彼女たちでも分かるようにしました。時間は砂時計にしました。休み時間には肩を叩く。そして、社長は社員たちに言いました。

「人間にはどんな人にも可能性がある。それを引き出すのも、また人間の幸福だ。だから、従来の作業方法を彼女たちに教えるのではなく、作業工程を彼女たちの能力に合わせてよう。いいかい、みんな、もし、彼女たちが作業を間違えたら、こちらの指示が悪かったと思うんだよ」

現代では、一定の企業には障害者雇用が義務付けられています。なにしろ五十年前も前の話です。この社長と社員の努力には頭が下がります。

もちろん、彼女たちは社員の力を借りながらも、毎日、毎日、それが天職ではないかと思うほど、働いたそうです。

ある日、社長は更衣室に何気なく置かれた彼女たちのノートをのぞきました。

そこには、子供のような字で、「わからないことは、ききます」と書かれ、次のページをめくると、さらに大きな字で「がんばる」「がんばる」といくつも書いてあったと言います。

知人がこの工場を訪ね、現会長にその話を聞いていたとき、ひとりのおばあさんがお茶を運んできたそうです。会長は、そのおばあさんを差して、言いました。

「この人が、最初にやつてきたふたりの女学生のうちのひとりです」

日本理化学工業株式会社。その後も、障害者を採用し続け、いまでは全社員の半数以上が障害者です。工場見学者があとを絶ちません。

会長は、大学卒業時、教員になる予定だったけれど、病気がちの父のため、家業の工場を継いだのだそうです。チョークに教育の情熱を注ぎこんだのかもしれない。

（月刊MOKUと著者のご好意により転載）

ふれあいコンサート 2009 について

日時 6月6日（土曜日） 午後6時半開演

入場料 3,000円

出演

深津純子（フルート）

逆瀬川健治（タブラ）

ファビアーノ・ド・ナシメント（ギター）

お問い合わせは 0470-38-4740 かホームページからどうぞ

ファビアーノさんはブラジルのリオデジャネイロ生まれで、現在はアメリカ、ロスアンゼルスで活躍中。

深津さんお気に入りのギタリストだそうです。逆瀬川さんの幽玄なインド打楽器との取り合わせが楽しみです。

どうぞご期待下さい。